大きい。

パワーアンプの究極の姿。

最大出力：300W/8Ωという数字にはもはや驚くほどのものはありませんが、1Ωで1530Wとなると並大抵ではないと認めていただけると思います。スタックスのパワーアンプの歴史はかなり古いのですが、正式なスタートは1974年のDA-300からと言っても差しつかえないでしょう。当時ピュアDCアンプと言うとアムクロン位しかなく更にAクラスというと他に類をみないものでした。かのマークレビンソンすら自らのパワーアンプが完成するまで彼のDHQシステムにDA-300を採用していた程です。その後DA-300の設計思想をうけついで小型化されたDA-80、DA-80Mが製品化され、1980年には一世を風靡したスーパーシャント回路や対アース増幅を搭載したDA-100M、そして1981年にはDA-50Mが製品化された事は記憶に新しいところです。

なりをひそめていたスタックスの技術陣が満を持して完成させ、ここにお目にかけるのがDMA-X1という訳です。アンプにおける電源部の重要性はいまさら申しあげるまでもなく既にスタックスではDA-300時代から設計の段階で大きなコスト配分を電源にふりむけてきましたが、ここまでぜいたくな電源はスタックス、いや世界にも類を見ないと思います。大型の(なんと1760VA)というトロイダルトランスを＋/－に各々1個用意し、更にチョークを2個、更に10万マイクロのケミコンを4個と、アメリカ製の超弩級パワーアンプを見慣れた目にもこれはと言わしめるだけのものをもっています。更に出力のデヴァイスとしては今さら説明を必要としない素質の良さを持っているにもかかわらず、セレクトしなければ 使えない為に 必ずしも一般化していない、パワーMOS FET を採用。繊細な音も逃さず再生するコンデンサースピーカーとのマッチングも充分考慮しました。入力はバランスとアンバランスが切り換えられ、アッテネーターはワイヤードリモコンが付属、大型アンプをスピーカーの傍に置いて使う際の便利性も考慮されています。もちろん保護回路はすべて完備。アンプ自身を保護するだけでなく、接がれたスピーカーに対する配慮もいきとどいております。又パワーインディケーターはこれまでの8Ω換算ではなく、電流と電圧を積算して実効値を表示するアクチュアル・ピークインディケーターを装備しています。今考え得る最もぜいたくなパワーアンプとして、DMA-X1をあなたもお聴きになってみませんか。